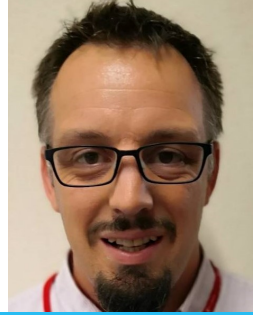


JONES Thomas E. 教授

日本における野生生物ツーリズムと世界の野生生物ツーリズムをつなぐ



野生生物ツーリズムとは？

野生生物ツーリズムは、野生生物に対する需要の増加と生物多様性の減少により成長を続ける世界市場です。野生生物に悪影響を及ぼす人間の行動を抑制することが目的で、公園の管理者たちは多様化する観光客層への教育を試みています。観光客に対して責任ある行動を促すため説得力のあるコミュニケーションの方法を模索しているのです。このように野生生物ツーリズムは持続可能性と観光研究を掛け合わせたいま注目のキーワードとなります。

研究で明らかになったこと

調査の結果、この分野の論文が2010年以降に倍増し、野生生物ツーリズムへの関心が高まっていることがわかりました。この分野の論文は主に環境保全や環境科学に関連したジャーナルに掲載されており、観光関連ジャーナルに掲載された論文は、日本語で書かれた2本を含む6本のみでした。これは、この分野の研究が環境保全や環境科学分野の研究者からの注目度が高い一方で、日本の観光研究者からはあまり注目されていないことを示唆しています。「野生生物ツーリズム」という用語も日本の論文では明確には使用されておらず、代わりに多くの研究がエコツーリズムの枠組みの中で議論されていました。これらの調査より、日本における野生生物ツーリズム研究はいまだ初期段階にあり、今後より多くの学術的なアプローチと世界との連携が必要であるということがわかりました。

ケーススタディー①：猿山公園研究（ジョーンズ, 2019）

野生生物ツーリズムは、観光客を自然に引き込み、保全を推進する姿勢を助長し、経済的利益を生み出す可能性があります（Karanthら, 2012）。しかし、観光訪問のダイナミクスは常に変化しているにもかかわらず、需要の変化を調べるセグメントベースのアプローチを採用した先行研究はほとんどありません。私は、このギャップについてインタビューで得たエビデンスを用い、日本の農村地域にある2か所のマカクザル生息地の公園を比較し、ビジターセグメント毎の縦断的トレンドを調査しています。1953年、日本初の猿山公園が、大分市の太平洋沿いにそそり立つ休火山、高崎山にオープンしました。大分県は日本南部に位置し、湿気のある温帯気候地域です。一方、1964年に長野県の峡谷にオープンし地獄谷野猿公苑として知られているこの公園は「スノーモンキー」が見られることで有名です。2つの公園は異なる特徴を持っていますが、どちらもマカク属のサルを屋外で見ることができ人気のアトラクションです（Knight, 2006）。野生生物ツーリズムを促進しつつも、サルによる農業被害を回避しながら、食料供給を行う対策が行われてきました。（Knight, 2017）。しかし、1998年の長野冬季オリンピックを機に、スノーモンキーが世界に知れ渡り認知度が急上昇したことから、温泉に入るサルを見るために同公園を訪れる外国人観光客が増加しました。逆に、高崎山は、海外からの観光客が緩やかに増加してはいるものの、長期的な国内需要の減少を埋め合わせるには至っていないオプション・エクストラ・アトラクションです。今後の研究の筋道が明確となり、需要力学の収束、食料供給の削減、観光客のマカクサルへの餌やり防止の取り組み強化などの潜在的な課題が明らかになりました。



ケーススタディー②：ウサギ島（笛吹 & Funck, 2020）

ウサギは環境省により「外来種」に指定されているため、人とウサギのふれあいは飼育管理下で行われるのが一般的ですが、瀬戸内海に浮かぶ大久野島では、ウサギが島内を自由に歩き回っており、観光客はエサをあげたり、触ったり、写真撮影をしたり動物園等で触れ合うのと同じように触れ合いたいと考えてます。しかし、島は特別地域に指定されているため、このような行動は問題となっています。

研究の目的

この研究の目的は、日本で行われている既存の野生生物ツーリズムを批判的にレビューし、議論することで、日本の野生生物ツーリズム研究の方向性を海外の野生生物ツーリズム研究の方向性に合わせていくことです。私は、広島大学の笛吹 理絵氏（現在APUサステナビリティ観光学部助教）、国立環境研究所の久保 雄広氏とともに日本語のデータベースCiNiiや英語データベースWeb of Sciences、EBSCOHost、SCOPUSを利用し、日・英で書かれた論文の調査を行いました。

学部

サステナビリティ観光学部

研究分野

環境政策、自然観光、
プレイス・プランディング、
地方創生